

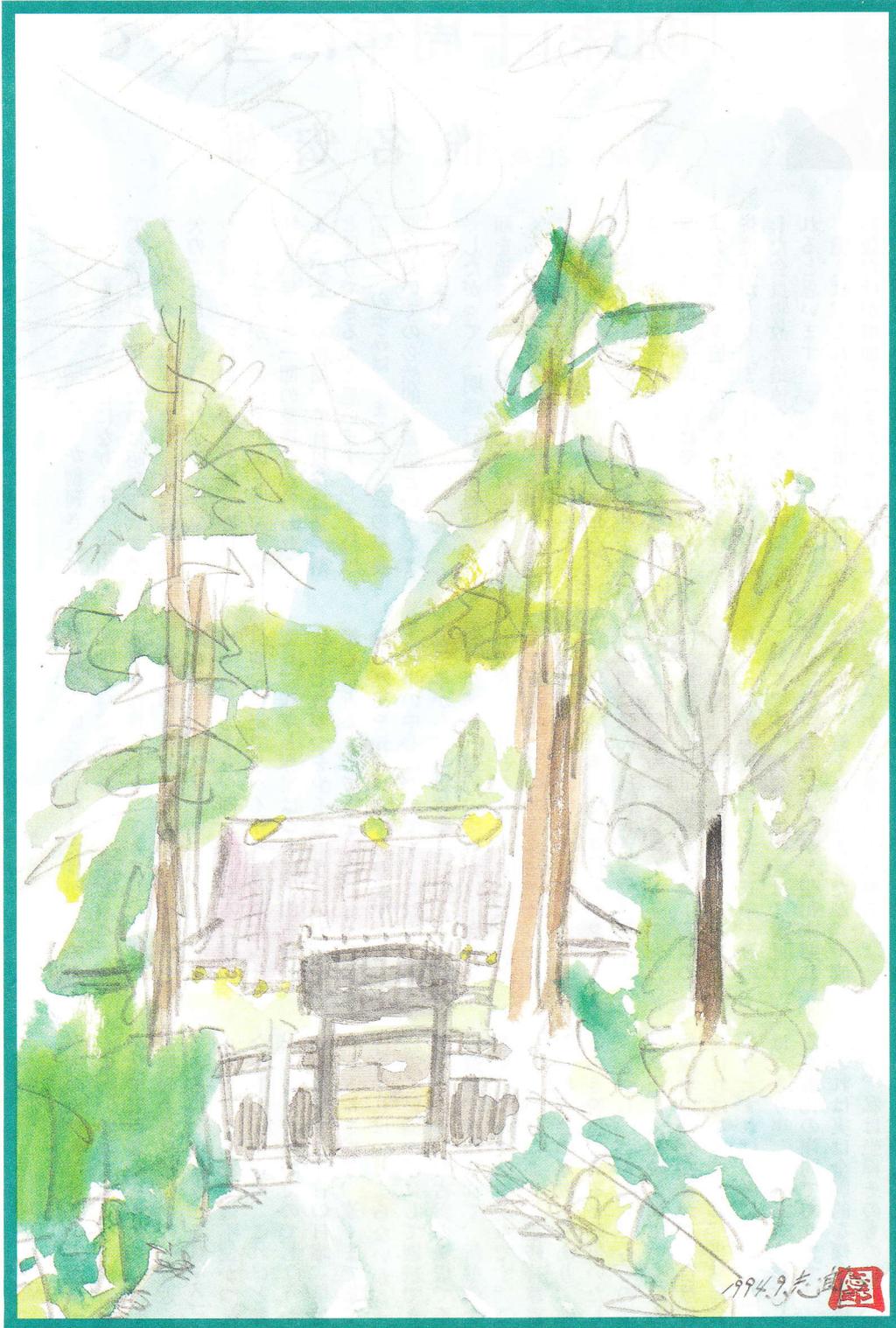
明珠

龍泉院
参禅会会報

20

平成6年10月5日

発刊十周年記念号



題「禅寺龍泉院」 現代美術家協会会員 青木志郎 画伯 作

「明珠」十周年に当って

椎名宏雄

龍泉院住職



早いもので、「明珠」が創刊されてから、もう一〇年目になります。当山で参禅会が発足したのは昭和四六年です。すから、今年は一〇年目、まさに光陰矢のごとき感に打たれます。

今後、この会がいつまで続くかはわかりませんが、これまでのところ、昭和五八年に第一回の成道会が行われるまでが会の草創期、それ以後は発展期と区分できるかと思えます。とすれば、「明珠」の歩みは、まさしく会の発展期においての必然的な産物といつてよいでしょう。

したがって、「明珠」を創刊号から順を追ってみると、そこには会がぐんぐん活動し伸長発展している様子が手にとるようにわかります。行事としては、毎月の例会、年中行事の新年会・一泊参禅会・施食会の手伝い奉仕・成道会・歳末大掃除があり、また臨時行事としては、平成三年に発会二〇周年記念として実施した禅を聞く会・在家得度式があり、また昨平成五年に実施した会員物故者追悼会、などが特筆されると思えます。

憶えば、これらの諸行事はただ単に回数だけが増加してきたものではありません。例会も年中行事も、少しずつではありますが中味が濃くなり、内容が深くなってきました。

たとえば、成道会はずっと他山の若方丈さんたちにご随喜をいただきました。

だが、平成三年からは会員がすべての配役を自前でこなし、文字どおり手づくりの報恩行になってきました。また一泊坐禅も、バスで遠くの大藍名刹を訪ね、先方のスケジュールに従って参禅する仕方から、回をかさねるに従い自前の差定でじっくりと坐る傾向へと変わり、昨年と今年はついに当山を会場に各七炷づつを坐るといふ、いわば小接心に近くなってきました。もって会員の熱意を知るべきであります。

行事の中心は例会です。これも、平成二年からは年番幹事二名によつて、会の諸準備・進行・後片づけ・会計などの責任体制となり、本堂と大悲殿とをフル活用しての弁道修法がとられるようになりました。年番幹事さんはまた、年中諸行事一切の責任者でもあり、一年間はほんとうにご苦労の連続です。ただ、例会のスケジュールそのものは、坐禅―経行―坐禅―講義―座談の順と時間は発足以来まったく不変であり、一〇年一日どころか二三年一日のごとくです。例会の出席者は、最近では平均二〇数名でしょうか。昭和末期には増加の一途をたどりましたが、平成になってからは横ばいの状態です。その理由は、坐禅修行が一般から飽きられたのではなく、柏近辺ではほかに坐禅会をはじめた寺院が増えてきたからだと思えます。坐禅人口はむしろ増大しているようです。だいたい、わ

が国の坐禅人口は五千人から一万人に一人といわれています。すると千葉県全体で五百名から千名、したがって龍泉院の会員はその中の一割近くを占めていることになり、これはスゴイです。

なぜ、こんな交通不便かつ凡庸菲かな住職の田舎寺に、これほど熱心な会員の方々が集ったのでしょうか。答えは簡単です。休日の日曜、早起きしてハンドルを握り、遠くまで車でかけつけなければつとまらないからこそ、真に道心堅固な者にして継続できたのであり、こうした古参の謙虚で不言実行の道念に感化されて、新参の者がこれを受けついでいるからです。このような乳水と合による久参修持尊重の姿勢が当参禅会の原動力であり、他にはこのべき特色であると確信いたします。

しかし、どんな会でもその活動の慧命が正しく相続されていくためには、相続者の補充交替がよく自然に行われなければなりません。当参禅会に問題ありとすればまさにこの一点であつて、はつきり申し古参の会員にしのびよる高齢化の傾向であります。

これは実は全国的な傾向ではありませんが、私は坐禅そのものに問題があるのではなく、一時的な現象であると思つています。私たちは、むしろ不断の弁道によつて縁ある人々を自然に感化させるべく、一層の精進を誓おうではありませんか。

合掌

(坐禅中)



明珠と共に

幹事 小畑節朗

昭和五九年に第一号を出した『明珠』は、本号で二〇号を迎えました。当初、私と高野千代子さんと二人で編集を引受け、慣れないまま粗雑杜撰な仕振りで、椎名老師の綿密な校正を頂いて、仕上りはそれなりのものになったという訳で、汗顔の至りです。

その後、一五号より杉浦上太郎さんにバトンタッチして、女人裸足の名編集でこの二〇号を迎えたことは誠に有難く、嬉しい限りです。

この一〇年、年二回発行の中で、第一二号の付録として『教主釈尊―その悲・智・慈の教え―』の小冊子を出したことは特筆すべきことでした。これ

は平成二年六月に、鹿沼の常真寺さんに一泊参禅の折に住職の皆川廣義先生の法話を高野さんが何週間もかけてテープ起しをした労作で、しかも皆川先生ご自身で原稿に朱を入れて頂いたものでした。平成二年一二月に一千部発行して皆様に読んで頂きました。

何事によらず続けて行くということには至難のことであり、会員の皆様のご支持とご協力があって成り立っていることは言うを待ちません。しかし、翻つてみますと『明珠』の継続は取も直さず「坐禅」の相統そのものです。

椎名老師がもう何度も申されるように坐禅は「自己をならふ」行でありま

すから、自分が本来の自己に対する深まりを点検していかなければならない訳で、道元禪師は「正師」に就くべしの金言をお示しです。

参禅会で月一回でも正師に会って点検し、点検の上での坐禅をするのが参禅の大きい意義でありましょう。年二回発行の『明珠』もことさらに禅々と主張しなくても別の意味での点検の役目を果たす場所であり又会員全体として共有できる場所であれかしと念じております。それはあくまで「自己をならふ」坐禅と「共に育っていく」在家集団（参禅会）が相矛盾しないで仏道を行っていく場所に外ならないからです。



参禅会・明珠に感謝

代表 高間利介

早いもので「明珠」が発刊されて、もう一〇年も経ったのででしょうか。思えば私が当参禅会にご縁をいただいたのは、東京からここ沼南町に工場を移した頃どちらにも知り合いの方がなく淋しい思いをしていた折、ご老師より参禅のお誘いを頂きましたのがきっかけでした。

集まった方は自衛隊の方が数名と、近在の方が数名でそれでも皆さんとお近付きになって、月に一度の参禅に寄せて頂きました。森岡さん、小畑さん寺田さんその他の方がお見えになりました。その頃、時にはだれも見えず、老師さまお独りの時もあつたと伺つて

おります。

その頃は参禅の折は無駄口は一切無用ということに唯黙して打坐聴聞しておりましたが、だんだんお茶を頂いたり話しあつたりするようになりました。またその後、成道会の開催、会誌『明珠』の発刊、一泊参禅会の実施等と次々と会の活動が充実してきました。

今から考えてみますとそういう空気ができるには、会員相互の気心や連帯感をもちたいという思いが醸成されていったからではないかと思えます。

私は数年前に、若い時からの無茶がたまり身体をいためてしまいました。みなさまのお陰で命だけはとりとめ

させて頂き今日に至っています。

その後の参禅は適いませませんが、折に触れてご坊には参詣させて頂き、その日一杯を生かさせて頂いていることを感謝いたしております。

申しおくれましたが、会員のみなさまがお変りなくご精進遊ばされておられることを嬉しく存じております。

また「明珠」創刊よりご努力されてこられました小畑さん、高野さん、その他の方々に深く感謝申し上げます。

最後に「明珠」発刊十周年を迎えた今、このことを一つの節目とさせて頂きまして坐禅修行に更なる弁道精進を誓い合いたいものと存じ上げます。

「明珠」の記事から見る 龍泉院参禅会の歩み

昭33

● 椎名老師龍泉院住職就任、坐禪指導開始

昭46

● 龍泉院参禅会発足

(号数)

昭60

● 会誌「明珠」創刊
● S 59・12月2日「第二回成道会」実施

昭61

● 椎名老師「第七次駒沢大学中国仏教史蹟参観団」の一員として訪中(9月2日〜25日)
● S 60・12月8日「第三回成道会」実施

昭62

● 千葉県曹洞宗青年会主催「接心」に武田博志氏が参加

昭63

● 6月7・8日「迦葉山一泊参禅会」実施

平元

● S 61・12月7日「第四回成道会」実施
● 千葉県曹洞宗青年会主催「接心」に小畑節朗・沢村国勝・武田博志氏の三名が参加

昭63

● 7月4・5日「迦葉山一泊参禅会」実施

昭63

● S 62・12月6日「第五回成道会」実施

昭63

● 6月4・5日「大雄山一泊参禅会」実施

昭63

● 聖僧文殊大士像新添協賛活動開始
● S 63・12月4日「第六回成道会」実施

昭63

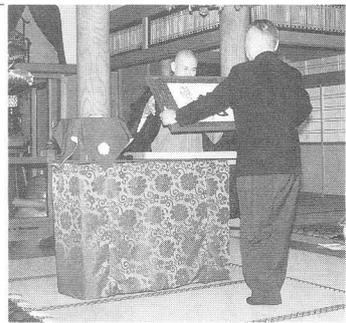
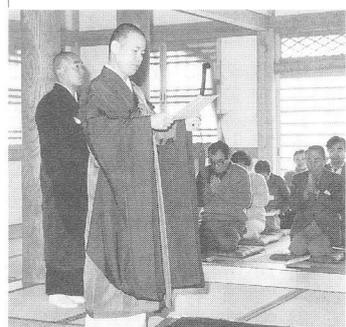
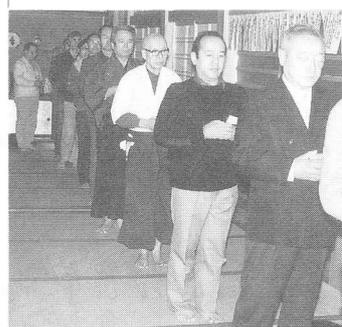
● 千葉県曹洞宗青年会主催「大接心会」に小畑節朗・加藤健之・沢村国勝・高野千代子・武田博志氏の五名が参加

昭63

● 6月10・11日「黒羽山一泊参禅会」実施

10

● 6月10・11日「黒羽山一泊参禅会」実施



※月例参禅会の記載は省略

平2

11

- H元・12月10日「第七回成道会」実施
(年番幹事制発足。三町敷氏と添田昌弘氏就任)

12

- 6月9・10日「常真寺一泊参禅会」実施
- 皆川老師法話「教主釈尊」付録誌作製

13

- H2・12月9日「聖僧文殊大士像開眼供養」
「第八回成道会」実施

- 仏師萩原清光氏「仏像を造る心」寄稿

- 2月17日「新年会」実施
- 年番幹事に今泉章利氏と杉浦上太郎氏就任

14

- 6月8・9日「常真寺一泊参禅会」実施

平4

15

- 参禅会発足二十周年特別行事挙行政

- H3・10月13日「在家得度式」

- H3・11月10日「公開講演Ⅱ 禅を聞く会Ⅱ」

- 3月15日「新年会」実施

- 年番幹事に徳山浩氏と武田博志氏就任

- 6月6・7日「総持寺一泊参禅会」実施

- 龍泉院観音堂(大悲殿)改築円成

- 7月5日落慶法要挙行政

- 千葉県宗務所主催「第四次中国仏教史蹟参観団」に椎名老師・五十嵐嗣郎・武田博志氏の三名が参加(5月16〜23日)

- 千葉県宗務所主催「第四次中国仏教史蹟参観団」に椎名老師・五十嵐嗣郎・武田博志氏の三名が参加(5月16〜23日)

- 8月16日龍泉院「大施餓鬼会」に会員九名が作務奉仕

- 会員清水利一様逝去

- 8月16日龍泉院「大施餓鬼会」に会員九名が作務奉仕

- H4・12月6日「第一〇回成道会」実施

- 前回より会員による配役にて実施

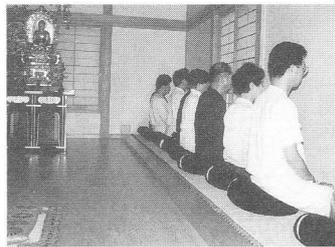
- 2月19日「新年会」実施

- 年番幹事に中野宏誠氏と宮本茂氏が就任

- 会員の中川俊二様、染谷はる様逝去

17

平5



平6

18

- 6月12・13日「龍泉院一泊参禅会」実施
- 8月16日「龍泉院大施餓鬼会」に会員八名が作務奉仕

19

- 北海道南西沖地震の義援金募金活動実施
- 曹洞宗千葉宗務所主催「第五次中国仏教史蹟参観団」に、椎名老師・小畑節朗氏が参加

20

- H5・11月6日「会友追善法要」実施
- H5・12月5日「第一〇回成道会」実施
- H5・12月26日龍泉院年末大清掃作務に多くの会員参加

- 2月13日「新年会」実施

- 年番幹事に寺田哲朗氏と安本小太郎氏就任

- 6月11・12日「龍泉院一泊参禅会」実施

- 8月16日「龍泉院大施餓鬼会」に会員九名が作務奉仕

- 「明珠」発刊十周年記念二〇号発行



19 会友追善法要

… 「明珠」 六話

編集 杉浦上太郎

一、「明珠」誕生の由来

龍泉院参禅会誌「明珠」が創刊されましたのは、昭和六〇年四月でした。椎名老師が龍泉院住職に就任されたのが昭和三三年。住職になられてからすぐ地元の人々に坐禅指導を開始されました。昭和四六年七月から、今日と同じスタイルでの定期的な参禅会を主宰されるようになりました。



椎名老師の坐禅姿

そして、参禅会発足後一四年目の昭和六〇年にこの「明珠」が誕生いたしました。それ以来年二回の発行を一度も休むことなく継続し、満十周年の二〇号発行の運びとなりました。

二、「明珠」名称の由来

参禅会誌創刊にあたり、椎名老師が次の根拠を示されて「明珠」と命名されました。

「明珠」とは、真如・仏性・法性・

本来面目などのたとえであり、これはこの世界における真実のすがたを示している。常に円満で無欠無余、表も裏もなく、不二平等、内外玲瓏、キラリと光っている当体そのものであつて、これを明珠とたとえる。

明珠

揮毫も椎名老師

「正法眼蔵」に、唐代の禅匠、玄沙師備の言葉「尽十方世界一顆の明珠」を拈提した「一顆の明珠」の巻（嬉しくも本誌創刊の当月より、椎名老師の講義開始）があり、尽十方世界から仏性一元の世界で自己本来の真実のすがたであることを示している。尽十方世界、絶対真実の現実を徹底して生きぬくことが仏法の修行であり、坐禅こそその行そのものであり、十方世界を坐断した無心のすがたにはかならない。」（「明珠」創刊号ご参照）

十周年を迎えた今、再度よくよく肝に銘じたいお言葉であります。

三、「明珠」発行日の由来

「明珠」は年二回発行で、その発行

月日は、毎年四月八日と一〇月五日と決められております。

四月八日は、皆さまよくご存じの「釈尊灌仏会（花まつり）」で、お釈迦



常真寺の釈迦如来像

様の誕生をお祝いするご縁日です。

一〇月五日は、知る人ぞ知るあの菩提達磨様の命日「達磨忌」なのです。

丁度半年間隔で、この二大仏祖様のご縁日に発行する「明珠」。毎号深い仏縁に感謝しつつ皆さまのお手許に。

四、「明珠」は傑作揃い

「明珠」は、椎名老師の玉稿と会員の投稿によって作製されております。

創刊から一九号迄の珠玉編をご紹介します。申し上げます。

●椎名老師の「從容録に学ぶ」

第二号から前回の一九号迄連続掲載。

「碧巖録」と並ぶ中国禅の文学作品として禅門での愛好書との旨。

その内容は「示衆」「本則」を読み下しに書かれ、椎名老師独特のさまざま

会員の心で綴る…

まなエピソードを交えた解説や、ご自身が中国で撮影されてこられた写真を配し、大変興味深く解りやすく読ませているだけの深い指導編であります。

●森岡俊雄氏の「作刀と坐禅」

第一号から第五号迄の連続掲載。我が国有数の刀匠南海太郎の昭和の継承者でいらっしゃる森岡氏が、作刀と坐禅の関係について、いろいろな観点から述べられた大変な力作でした。



作刀に励む森岡氏

●武田博志氏の「インド旅行記」

第五号から第七号迄の三回連続掲載。釈尊の故郷インドを訪ねての一人旅。インドの人々との温かい心の触れ合いが随所に出、大変感動的でありました。●故中川俊二先生の「心と体の相関」第六号に掲載。

「心身医学」を草創された今は亡き中川先生が唯一投稿くださった珠玉の一文であります。

現代医学は心無視、これからは心と体の両面を考える全人的医学を行うべきと述べられ、どんな状況下でも生き甲斐と希望をもって生きることの大切さを示されております。

●その他多くの会員諸氏から寄せられた

感動的なもの、格調高いもの、示唆深いもの、ユーモラスなもの等々誠にバラエティに富んだ、傑作がズラリと掲載されております。

「明珠」バックナンバーは、大悲殿から本堂へ至る廊下の図書コーナーにあります。ご自由にご覧ください。

五、青木画伯による表紙絵

当参禅会員の青木画伯（野田市）のご好意によりまして、「明珠」二〇号の当誌の表紙は、素晴らしい絵で飾ることができました。



青木画伯

因みに同画伯は、龍泉院参禅会を取材した作品「坐禅風景」で現代美術家協会の会員に推挙された旨（本誌第一七号ご参照）。人間が人間らしく、が創作コンセプトとのことで、やはりその作風には大変温かみを感じます。この度、記念号発行の企画をもって製作を依頼申し上げましたところ即座に快諾くださいました。本当に心より感謝申し上げます次第です。

六、「明珠」編集子雑感

創刊当初から「明珠」の編集には、小畑さんと高野さんが携わってこられました。長年のご努力と労苦をいとわぬ頑張り精神での継続が、今回の二〇号発行に繋がったと思います。

高野さんは、キメ細い誌面づくりや、第一二号付録「常真寺住職皆川老師の法話「教主釈尊」」に代表される数々のテープ起しなどエネルギーシユな編集手腕を発揮されました。

小畑さんは、参禅会運営にご尽力くださる中での活躍。とくに巻末の「沼南雜記」の文調は大変格調高く、お人柄はもとより平素の仏道精進のご努力が偲ばれるものであります。

そんな素晴らしいお二方の後を、いとも気安く引き継ぎましたのが大凡夫の私、杉浦です。後日それは大変な暴挙であったことに気が付き、独り赤面し大いに恥入った次第であります。今は只管一生懸命努力させていただくという気持ちに免じて皆さまにお許しを願いつつ、編集者冥利享受。合掌

小畑氏



高野さん



参禅会員の資格無し

船橋市 森岡俊雄

足掛け二〇年も御老師にこれだけの教育を賜り、ろくな刀も打てないのは論外に存じます。不景気になつたら売れぬ刀しか打てぬ私は参禅会員の資格がありません。釈迦は六年、達磨は九年と申します。馬鹿な私は六〇年やつてます。もう年が年ですから外の仕事は出来ません。刃物鍛冶はやりたくありません。もう仕方ありません。私の行く道は一つです。寺院の事も何一つ皆様と同じ様には出来ません。唯御師家様が出て来いと言われるので出来るだけ出席させて戴きます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

鎌田先生の菜根譚

との縁

千葉市 寺田哲朗

龍泉院参禅会誕生二〇周年を記念して開催した「禅を聞く会」で鎌田茂雄先生のお話を拝聴したのは三年前のことです。今NHK「心をよむ」の時間で「菜根譚」

仲よく坐禅修行する寺田氏兄弟



の講話をされていきますが、当時と変らず淡々として飾り気のない、温かい語調でわかり易く語りかけておられます。この録音テープを

中国の合弁会社に工場幹部として赴任した後輩に毎月送りました。大変元気づけられたとの手紙を受取りました。彼も家族との別居や仕事上の苦労から「逆境」に悩んでいたのです。参禅会の縁の意外な展開。

気持ち新たに

松戸市 徳山 浩

毎月一回の参禅会ときは、椎名老師の書かれたお言葉を拝見し山門に入ります。本堂を正面にした何時もの見慣れた景色ですが、そこには四季の変化と樹々たちの豊かな表情があり、その都度新たな発見に感動させられます。そして心の安らぎを覚えるのです。

入会の許しを得るためにはじめて龍泉院を訪れたのは、「明珠」創刊の前の年でした。

今日あることの幸せと感謝の気持ちで、これからも「月いち参禅」に励んで参りたいと思っております。



副堂を務める徳山氏

回想

我孫子市 三町 勲

龍泉院にお世話になり、はや二年になります。しかし、月一回の参禅会の出席率は余りよいとはいえません。下世話の諸事に振り回されて、参禅会に出席できない人生なんて、生きがいなんてないではないかと自問自答することも度々です。

それにしても、一年に一度の泊参禅会は、会員一同が二日間寝食をとることに参禅に打ち込む貴重な時間であり、気持ちも充実して

います。今年も六月に龍泉院で一泊参禅会が行われました。今年も猛暑で六月とはいえ本堂の中はむしむししており、一日目の午後の一炷目は、気だるさもあり集中できない有様でした。突然、神鳴りがとどろき、私の五体が宙に浮き上りました。次の瞬間五体は坐蒲の中に深々と沈んでいきました。そして、身体がぴたりと静止した時に、無限の静寂の中に身心が吸い込まれていきました。何と安楽の境地なのだろう。

後になって、あれは何だったんだらう。これが本当の坐禅なのだろうか。見性するということは、こんな状態をいうのだろうか。それにしてもあの時の神鳴りは何だったんだ。そうだ、ご老師の一喝であつたのだ。集中できない我々に、「動くなあ」と本堂中に響きわたる声だったのだ。有難いことだ。二度とこんな坐禅はできないだらう。

龍泉院の修行を通して、十数年にして一度だけでもこんな坐禅ができたことは、大変光栄である。回想するのは、修行も一人ではできない。仲間同志の協力や努力とご老師の温かい導きがあつてこそ、本来の坐禅があると感謝する。今日此頃です。

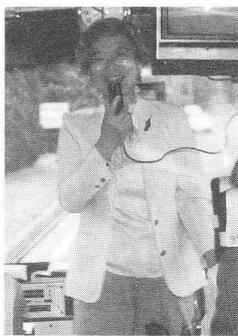
合掌

一〇年を振り返って

柏市 高野千代子

参禅会会報も二〇号発行というお知らせをいただき、昭和六〇年四月八日発行の創刊号から一〇年の歳月が過ぎ去ろうとしていることに気づかされ、長いようで短かった日びと大勢の方々の思いが綴られている明珠を改めて読みかえしてみました。

創刊号の巻頭の言として、椎名老師が、坐禅こそは、この尽十方世界の行そのものであり、十方世界を坐断した無心の姿にはかならない。ねがわくは明珠の名を汚すことなく、自己本来の真実相に、直参直入して宝珠をして、ますます明光あらしめんことをと念じられているお言葉に接しました。その念の新鮮なひびきに身のひきしまる想いを感じました。



一泊参禅行の高野さん

熱しやすく、さめやすい私、安きに流れ、言いわけのにげ道を作って生きてきた人生をふり返る

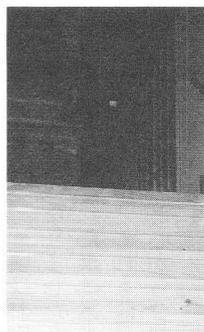
とき、この先、そんなに長くはないよともう一人の自分が囁きます。本当に本当、人生最後に何を思えるか、しみじみと気づかされた昨今でした。

落ちつき安定安心

流山市 中嶋南洲男

龍泉院に伺い坐禅をするまでは何をやっても落ちつかず心の安定安心は得られなかった。

若い時から収入の事はあまり考えずに仕事に打ち込んだ。夜も遅くまで、休日も仕事をした。疲れると病院に行き注射を打って仕事を続けたが、いくらやっても落ちつかず心の安定安心は得られなかった。



晩天振鈴の中嶋氏

またスポーツや遊び（ゴルフや夜遊び等）もそれなりにやったが、そこにも落ちつけるところはなく安定安心は得られなかった。

龍泉院に伺いしばらく坐禅して、椎名老師に結跏趺坐をどの様に組

めばいいか尋ねた。

その時の言葉は「最初は誰でも結跏趺坐を組めば足は痛い」「組んでいけば組めるようになる」。

その一言で結跏趺坐が組める様になった。上山し結跏趺坐を組み、ご提唱を聴かせて戴いているうちに、今までに体験したことのない静かで落ちついた気持ちに出会えた。『ありがたい』『この静かで落ちついた安定安心した世界』

『龍泉院椎名老師の出会いに感謝』感謝の気持ちで毎朝短時間で「結跏趺坐」を組んでおります。合掌

再び参禅

千葉市 沢村国勝

参禅会に再び参会することになりました。再会時に御老師より温かい迎いの言葉をいただきうれしく思いました。又なつかしい皆様に出会った喜びの反面、数年の内に人徳あつた方々が他界され会えない淋しさに無常を感じない訳にはまいりませんでした。

個人的理由により、一時参禅を離れた所より見直しを余儀なくされた故にでした。「自身を知り、真剣に坐り切ること」を常に御教え下さる御老師には、ただただ感

謝する次第です。

合掌

何にも成らん坐禅

柏市 安本小太郎

記録的な暑い夏も、ようやく秋の彼岸を迎える頃となった。

人間の尺度では坐禅も楽である。当参禅会に来て、一一年、始めてから一八年、足腰の痛み、眠気、気のゆるみ等を通して、続けて来たが何もならん。ウツカリ、無駄口等煩惱のオンパレードは続く。

沢木興道師の「寒いのに朝早くから起きて、何にもならん坐禅をする尊いことだ」を思い出し、物になりそうな坐禅を続ける。

五欲を追っかけても、満足のいくものは何も無さそうだ。坐禅は、世俗とは少し違う。欲目にみて、八〇歳迄二〇数年、身体をいたわって、何もならん坐禅をやるか。

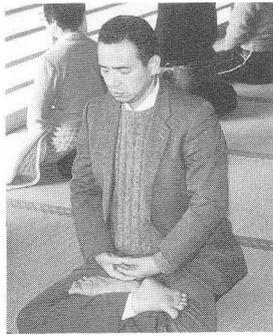


筍掘りの安本・添田氏

参禅会長期欠席会員の のたわごと

柏市 八木下真司

参禅会に参加させて頂いてかれこれ一〇年になりますが、最近の私は仕事上欠席ばかりで淋しさがひとしおです。普通ならばどうの昔に除名されている筈ですが龍泉院様の坐禅会だけは「今なお会員」と胸を張って（本当は大変申し訳なく思っているのですが）いられるのが何よりも有難い事だと感謝しております。「一回でも参加したら永久会員」とはなんともお心の広い方々ばかりなのだろうと感慨深いものがあります。これも椎名老師の「計り知れない大きさ」からの事なのでしょう。



坐禅中の八木下氏

この頃自宅ではなるべく一炷の坐禅を心掛けておりますが、龍泉院様の本堂で皆様とご一緒に坐らせて頂いている時とは較ぶべくも

なく「為坐禅、ダメ坐禅」の域はなかなか脱する事ができないのは申し上げるまでもございません。しかし「写経」と「坐禅」をノイローゼになりかけていた大手コンピュータ会社のエンジニアの甥にすすめたところ、近頃はお陰様ですっかり元気になりましたと、当人夫婦から喜ばれた事は本当に嬉しく思いました。これも龍泉院様の参禅のお陰だと心から合掌させて頂いております。

テニス雑感

柏市 五十嵐嗣郎

先日テニスの仲間と那須高原で強化合宿を行った。早朝五時半から夕方の五時まで約一二時間というハードなもので、子供達からは練習スケジュールを見ながら「まるで部活のノリだね」と冷やかされるながら出発した。

合宿ではリーダーがビデオカメラで一人一人の練習風景や試合の様子を撮ってくれたのを、夜の反省会で見ると、自分のプレー姿を見るのは今回が初めてである。何時も自分なりにキビキビと動いている積りなのだが、ビデオに映る自分の姿はノロノロと猫背で

うつむき気味と、とてもサマにはなっていない。余りに自分のプレーしているイメージとかけ離れているのに驚くばかりである。

VTRを通じて自分のプレー姿を客観的に見ることに、始めてプレー中のミスの原因がどこにあるのかがよくわかり、参考になる。しかし、自我像と他者に写る姿がこれほど違いがあることも始めて認識し、反省させられました。仲間の話しを聞いてみると、上手な人ほど自分のプレーイメージと現実の動作・姿が近く、下手な人ほど離れていることがわかって来た。私などはその距離が最も遠く、理想イメージに如何に近づけるかが練習課題ともいえる。



いつも明るい五十嵐氏

自分の動作や姿を客観的に見る事はVTRというハイテク技術が容易に可能してくれるが、自身自身の心を客観的に見る事はハイテク技術でもって出来ない。元

来、心不可得であるが、とかく本来の自己を客観的に鏡に映して見たくもなる。

鏡に映る真実の自己とイメージ上の自己との関係については、今ご老師が提唱されている「古鏡」の巻が終る時分には答が得られるのではないかと思っております。

お寺の門は広い

柏市 武田博志

気ばらしの散歩道で見かけた参禅道場の看板。引き込まれるように山門をくぐり、御住職に初めて面会した日から早や九年が経った。

その間様々なことがあったが、椎名老師の厳しさと温かさに助けられて今日まで来た。月一度の参禅会も欠席がちだ、会員の寛い心の輪の中で励まされ教えられたこともたくさんあった。お寺は抑制と開放が同時にある不思議な空間だ。本当の自分を浮き彫りにし、謙虚に命の有難さを思う。

積尊から始まった長い道の上に、椎名老師を先頭に参禅会員の列が続く。私が列の後で、ずつこけながらも従っていくのは、それが誰にとっても本当の道と信じているからだ。

富士山頂に感謝

柏市 栗田 章

「明珠」十周年記念号発行まことに
おめでとうございます。この間
編集を担当されて来られました方々
に対し深甚なる感謝を捧げます。

今年は例年になく猛暑でしたが、
天候の方は比較的安定しておりま
したので、**齢古稀**を記念して富士
登山を思い立ちました。富士山は
遠くから眺めるものといわれてお
り、また一生に一度は登ってみる
ものともいわれております。幸い
登る機会に恵まれ七月三十一日四時
四五分山頂に立ちご来光を拝し思
わず合掌、感激深いものがありま
した。富士山は山頂が見えても人
が多く仲々前に進まないのですが、
ゆつくりでも確実に一歩一歩進め
ると遂には目指す頂上に到達する
という貴重な体験を得ることもで
き感謝しているところです。

今後共よろしくご指導ご鞭撻下
さいますようお願いいたします。合掌

死の用意

沼南町 宮田哲男

以下はある新聞の投書欄に載っ
ていた、現代の一般的老人像であ

る。「年令自慢に元気の自慢、ど
こへでも顔を出し、ダンスに山歩
き、ゲードボールにカルチャーセ
ンターと、いろいろやって何も身
につかない」更に曰く「昔の年寄
りにあつて今の老人にないもの
いき、芸、義理人情と庭掃除、近
所付き合いと手紙書き」更に「死
の用意と寺参り」と結んでいる。



熱心に講義のメモをとる宮田氏と会員諸氏

「定年退職」これはサラリーマ
ンの宿命、長かったサラリーマン
生活を卒業して早や数年も経つと、
段々と高齢者ぶりも身につけて来
る。前述の記事はそれを批評した
言葉と痛切に受け取った。

特に最後の「死の用意と寺参り」
この意味は重大にしてまことに深
甚なものがある。

明珠十周年記念号 発刊をお祝いして

豊明市 北岡やす江

おめでとうございます。明珠二
〇号十周年記念号発刊されますと
のこと、日頃御老師様のご導きを
得られ会員の皆様のご熱心な精
進のご様子お羨やましくせめて会
誌を拝読させて頂けますことを有
難く楽しみにお待ちしております。
どうぞお願い申し上げます。今度
私、子供達が計画準備してくれま
した豊明市の豊明老人保健施設と
いうホームへ入所致しました。七
〇歳以上の治り切らない病のリハ
ビリをして少しでも豊かな最後を
迎えられる様にとの趣旨たそで、
病気になるれば提携の病院へ入れて
もらえます由。安住の地を与えら



椎名老師と談笑する北岡さん

れた思いで感謝させて頂いており
ます。生かされているうちリハビ
リに専念してまいります。
どうぞ今後ともよろしくお願ひ
申し上げます。

野辺の小草

我孫子市 清水秀男

人間は自分の意志と力で生まれ
て来たのではない。父母の深い因
縁により生み出され生かされてい
る。人間は大自然に他の生物と共
に生かされし生命体である。一切
の生命は大自然の子であり同胞で
ある。にも拘らず、人間は自分が
独力で生きており生きていけると
錯覚し、エゴと欲望をむき出しに
し驕慢な心で生きている。この誤つ
た自我意識を捨てられた時、人間
は真の人間になり大自然の生命と
互いに密接に連関し持ちつ持たれ
つの相関関係の中で生命力が顕わ
れて来るのではないだろうか。そ
こには比較の世界はない。自分が
自分なりに百%顕われし絶対の世
界である。自我意識を捨てること。
只管打坐。勉旃勉旃。

「小さきは小さきままに花咲きぬ、
野辺の小草の安けさを見よ。」
(高田保馬博士)

形見の「明珠」

佐倉市 宮原 惇

正法眼蔵を綴込んだ『明珠』を私は形見として持つている。各ページ椎名老師の提唱されたことが克明にメモされている。ただ有時の巻の最後のページだけはメモがなく参禅会を休まれたことが窺える。

この明珠は、故清水利一さんの形見として戴いたものである。有時の巻のメモのないページは、清水さんが肺癌の手術をされた翌月で、九〇年一二月の部分である。

この明珠は、諸聖莫作の巻の二ページ目で終っており『92・1・26』とメモされている。この日が、清水さんが参禅会に参加された最期ではないかと思う。それから三ヵ月後に亡くなられた。

清水さんの真摯な求道心を見習わねばならないと思っている。

初めての坐禅の思い出

船橋市 井之輪進

六年前の五月に初めて坐禅会に参加させて戴きました。何も知らずにやって来て、御老師様のご指導を受け、御仏殿の前で坐禅させて戴きましたのは、ついこの前で

あつた気がします。それ以来参禅出来なかつた時や、気乗りしなかつた時が何度も有りましたが、今迄継続してこれましたのは、何よりも自然に囲まれた素晴らしい龍泉院での四季の坐禅体験と、御老師様の講話のなかでの新しい発見、茶話会での皆様の有意義な体験談を聞かせて戴いているからです。



受講中の井之輪氏と会員諸氏

初めての一泊参禅会には、入会してすぐの六月に行われた『大雄山最乗寺』に参加させて戴き、今でもその時の印象が強く残っています。参道途中の三軒茶屋、霊山老杉の生い茂った壮大な寺院、坐禅堂での体験、朱色の超天狗の下駄、青白い夜空の星と吹き騒ぐ夜風、それと大変難しかった余語翠巖老師の御講話は忘れることが出来ません。

坐禅についてあまり難しい事は解りませんが、毎日がバランスの

とれた自然体で生活出来るよう、これからも永く坐禅を続けていきます。

ファイリツピン・ルソン島に出張して

我孫子市 盛 敏夫

ファイリツピン国ルソン島の電力事情が悪化していたので、バターン半島のリマイ地点に、火力発電所を建設可能であるかの調査に行きました。

丁度その年の六月にピナツボ山が爆発し、河床に火山灰がたまり、河川は氾濫していた。東京と同じように発展したマニラより車で目的地向かうと、至る所交通は寸断されていた。豪雨の中、車窓より森林地帯に目をやると、椰子の木の中に小屋が作られハシゴで出入りしていたり、道路のくぼみで、子ども達が水浴を楽しんでいた。どんな貧しい村に行っても教会だけは立派な建物であった。宗教はキリスト教で、宗教心は皆な持っているものだなあと考えた。

その年に停年を迎え、責任のない立場に変わった。地位も給料も下がって実に面白くなく、坐禅中

も雑念が頭に浮かんで来た。二年を経過し暑い夏も終る頃になり、補助的な仕事でも、感謝の気持ちで出来るようになって来ました。これからは目的を持った趣味も私の友としたいと思っております。



二回目の迦葉山一泊参禅

薬師如来の真言

船橋市 政安 裕良

今から丁度五〇年前、昭和一九年の九月一〇日、私は旧制高校の卒業式にも出席せずに、大学に席を置いたまま、予て志願していた海軍予備学生として、横須賀の武山海兵団に入団した。(当時は戦争の関係上、一年に三月と九月の二回卒業があった)

訓練その他については既に言い尽くされているので、今此処での紹介は省略するが、若い肉体にも

無理が祟ったのか、自覚症状は全く無かったが、基礎訓練も終わり、藤沢の電測学校に配属になる直前の、昭和二〇年の二月の某日、朝の総員起こしの整列に急ぐ兵舎の出入口で、突然意識不明となって昏倒してしまった。

どの位時間が経過したのか、自分では判らなかつたが、気がついていたら、海兵団の診療所で、所謂湿性肋膜炎ということで、背中から太い注射針で、水を抜かれているところだった。

その後湯河原の温泉街に設けられた、特設の海軍病院や、野比の海軍病院等を転々として、結局準士官という事で、確か四月頃だったと思うが自宅療養に切り替わった。然し空襲と食糧事情の悪い東京にはいられずに、未だ行った事のない、岡山県の父母の出身地に世話になる事になった。

場所は津山市の山間部で、父方と母方は、国鉄の駅で三つ四つ離れた距離の場所であり、然かも両家は父母の結婚前からの遠縁に当たる関係であった。

こういうところでの私の毎日の仕事は、滋養の有る物、主に鶏卵を一生懸命に食べ、吉井川の河川敷に当時沢山いた縞蛇を捕らえて来て腹を割き、これを乾かして焼

いて食べて、精力をつけて、一日も早く病気を平癒させ、原隊に復帰することであった。



笥掘りに興じる政安氏

父方の本家には父の弟夫婦と三人の子供、それに八〇を過ぎた祖母がいた。

私が縞蛇を取って来て、皮を剥いて物干竿に乾かしておく、祖母が「クチナワ」は「キョウトイ、キョウトイ」と言って、縞蛇を乾かす事を嫌っていた。

その祖母が朝晩、仏壇の前で「オン コロコロセン アリガトウ ソワカ」と、熱心に繰り返して呪文を上げていた。当時何も知らない私は、年寄りの迷信で何を拝んでいるんだろうと、密かに半ば侮蔑的な眼差しで眺めていた記憶がある。私は皆さんのお陰で、七月頃には、早くも病も癒えて、原隊復帰をしようと思っている間際に敗戦となって、結局死を免れる

ことになった。

翌年の昭和二十一年だったと思うが、大学時代に価値観の大変動に苦しんだのか、一人で奈良の仏像めぐりをした記憶があり、その時唐招提寺や薬師寺にもお参りしたことと思うが、遠く四十数年前のことで、今は全て忘却の彼方であり、ただ何処も訪れる人も無く、森閑とした佇まいであった様な印象が残っている。

数年前のこと、関西への出張の帰りに、同じく唐招提寺と薬師寺にお参りしたが、平日の静かな環境の中で、久しぶりに都会の騒音を離れて、ゆっくりお参りが出来、心の洗われる思いであった。

只薬師寺の金堂の薬師如来、日光、月光菩薩の所謂薬師三像を礼拝した際、何か電光の様なものを感じた。金堂の前には「礼拝される方は次の真言を唱えて下さい」と書いてあった。それは

オン コロコロ センダリ
庵 虎魯虎魯 戦 撃里
マトオギ ソワカ
摩登者 莎婆訶

というものであった。四〇年前に祖母が唱えていた真言はこれだ、と直感的に感じた。心の隅の何処かに、あの呪文は常だったのだろうかとの、疑問が常

にあつて、この真言を拝見した時に、四〇年前の記憶が鮮やかに蘇ってきて、全く申し訳ない、俺という奴は、何と馬鹿だったのだろうかと、慙愧の涙が流れてどうにもならなかつた。

八〇過ぎの婆さんは、若い小生に直接何も話しはしなかつた。然し心の中で、どうしても、この孫の病を平癒させて、軍隊に返さなければと、一生懸命薬師如来に朝晩祈ってくれていたのだ。その事も知らないで、自分の浅はかな傲慢と無知から、全く申し訳ないことをしてしまった。

私は真言の祈祷で直接病が癒えるとは、今でも思っていない。



参禅道場の龍泉院本堂

然しその真言を祖母が朝晩一生懸命唱えることよって、その周囲に及ぼした影響は多大なものであつたらうと思う。叔父夫婦、私の従弟達、母方の伯母夫婦と従兄の妻

(従兄は応召中)とその子供達、更には山間部の部落民に及ぼす影響等、勿論私が軍服を着ていた関係から、当時の時代風潮からくるものもあつたろうが、私に対する初対面の人々のご援助。それは大変なもので、田舎とはいえ、物が不足して、人々の心の荒んでいる時代に、色々な滋養物が差し入れられて、そのお陰で、私の病気も以外に早く治癒させて貰ったのだ。その真理も判らないで、口に出して言いはしないものの、仮にも迷信と、侮蔑的な眼で眺めていた己自信が許せない存在となつた。

今改めてこれ等の事を想起すると、慙愧の念が又新たにになり、涙腺が自ずから緩んで来る今日この頃である。

龍泉院の坐禅会には、平成二年の正月の月例会から、参加させて頂いていますが、今までの間、十牛図、仏像、経文等と、色々と自分の知らぬ世界が次から次へと疑問の対象として現れてきて、言葉は悪いが興味が尽きない。

経文のサンスクリットからの翻訳には、「五種不翻」という原則が有るといふ事を最近知つた。五箇条に触れるものは翻訳出来ないという原則である。

例えばその一は「深甚秘密の道

理のあるものは訳せず」というもので、「大悲呪」とか「消災呪」とか「尊勝陀羅尼經」等はこれに属し、又「善を生じ、ご利益のあるものは訳せず」として、「般若」という言葉等が上げられている。又「摩訶」という言葉の如く、「大、多、勝」という様に「多くの意味を持つものは訳せず」ということの様である。

この薬師如来の真言も「南無薬師如来」ということだそうであるが、この不翻の原則に入るのではなからうか。

私も世間の皆さんの恵みのお陰で、今年古稀を迎える事が出来た。今まで死にかかる事故や病気を、前記のものを含めて三回も潜り抜けて来ている。

もしかしたら祖母の真言が効いていたのかもしれない。自分が判らぬ事知らぬことは駄目なことで、不遜にも考えることの間違いに、最近やっと気づいてきた。

立花隆氏が文芸春秋に連載された「臨死体験」という記事を読んでも、自分には判らぬ神秘的な世界が多々あることが判つた。

恵林寺の快川国師は、織田信長の兵に攻められて、山門楼上で「安禪は必ずしも山水を須いず。心頭を滅却すれば、火も自ら涼し」

(碧巖録四三則)と唱えて、静かに火中に身を投じた。

明治維新の傑物山岡鉄舟居士は、胃癌での臨終に当たり、坐禅を組んだ儘三遊亭円朝に、見舞いの人達に落語を聞かせる様に依頼して、その落語を聞きながら「腹いたや苦しき中に明けがらす」の辞世を残して自己の創建した谷中の全生庵で従容として死んでいった。

「死」とは短期間にその人の人生が integrate (集約)されたものであるといわれる。

私も今古稀を迎え、どうしても死の間際のことを考えざるを得なくなつて来た今、無様な死に方だけはしたくない。少なくとも植物人間や、脳死状態だけは避けたいと思ひ、数年前に夫婦で尊厳死協会に入会した。

生死は一如 色即是空 空即是色 とはいふものの、未だその境地には達し得ず、坐脱立亡の死の美学に憧れ、出来れば自分もその様に、坐禅を組んだまま、従容とした死に方をしたいものだと思う。今日この頃である。



参道から臨む龍泉院

(追記) 以上を取りまとめた直後、七月の始めに急性の黄疸に罹り、急速七時間有るに亘る手術を受けなければならなくなり、現在尚入院中の身となつてしまつた。病氣と手術の性格上、万一の場合も覚悟しなければならぬ身となり、色々な経験をしたが、手術の経過中に観音様が現れて、何かを暗示された事が忘れられない経験であつた。現在はベッドの上で延命十句観音経を唱え、念彼観音力と唱え、般若心経を読んでいるが、どうやら又も命を救われた様である。是の事に就いては何れ感想を纏めてみたいと思つている。

心やすらかな参禅会

柏市 佐々木秀子

友に誘われ、参禅会に入れていただいて早や四年。何も知らない私は、日頃の雑事に追われる生活を、静かに坐って考えようとした。所が御老師のお話して、何も考えず、無になって坐ることが大切との事に戸惑いました。しかし、龍泉院参禅会には忘れかけていたすばらしい自然にふれ、椎名御老師の御人柄にひかれて皆様に御迷惑をかけつつ、細々続けさせていただき有難く感謝しております。これからも、よろしくお導き下さいますよう御願ひ致します。

こだわらず自分に

生きる道

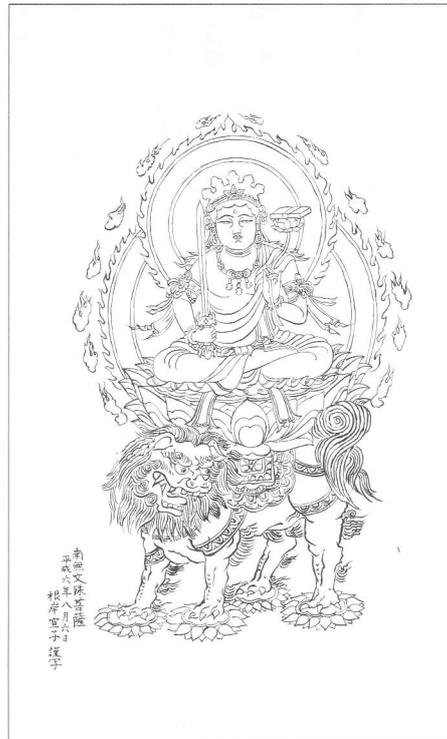
柏市 宮本 茂



侍番役の宮本氏

人生五〇年、下天のうちにくらぶれば、夢、幻のごとくなくなりけり。謡曲敦盛の一節である。私

自身、今年で五十半ばになったが、諸先輩の話しをうかがうと、この年令からこの世を去る時までの過ごし方が、大変難しいらしい。それ故に、出来ることなら、今迄のように、あまり物事にこだわらない生き方をしたいと思つてい



素晴らしい根岸宣子さんの写仏画

そして、精神的にユツタリと生きたいと思つている。そのためには、自分自身の日々の精進が不可欠であり、現在生かされていることに感謝する気持ちを持ちつづけたいと思つている。

る。自分自身、かなりこだわる方であると思ふし、むしろそれを心の支えとしてきたくらいであるが、考えてみるとそれはまた逆に、世間体や自分以外の他の人と比較をするという心を悩ませる要因の一つでもあつたようである。これからは、できるだけ自分の心に素直に従い、あるがままの自分の悪さ・欠点をさらけ出してもいいのではないか。人間完璧な、欠点のない人はいないのだから。

継続は素晴らしい

野田市 青木志郎

龍泉院参禅会誌「明珠」発行満十周年と聞きました。

おめでとうございます。

担当の杉浦氏以下関係者のご苦労に心打たれます。

系譜に照らしますと、椎名老師は、お釈迦様から八四代目になります。

楽 禅

柏市 木村 勇

心のスポーツという、気楽な受け取り方をして、宗派を越えた禅の研究が始まっているようです。表紙画作製に、小生を推挙頂き、感謝申し上げます。

私の本格的坐禅は、この龍泉院参禅会からです。考えてみますと小学生の頃歴史の授業で「いちにいちに」と我が国へ仏法僧の三宝がやって来たことを学び、その後中学で澤木興道師の坐禅の本に接し遊び半分で結跏趺坐を覚えしました。その後何回かやった程度ですが還暦を過ぎても結跏趺坐が組めるということ、この時のお陰と思ひます。さて坐禅をしながら心を何処へ持つてゆくかが問題でした。始めのうちは走馬灯の如くさまざまの思いが通り過ぎてゆきました。友人の話では、呼吸の方法で「ひと一つ」と心で数をかぞえる、又聖僧様の坐っている姿を思う法、いろいろ考えてみて最近やっと少し落ち着いてきました。今は無念無想に心掛けておりまして坐禅するのが楽しくなつてまいりました。

龍泉院参禅会簡介

- 一、日時 毎月第四日曜午前九時より
(初参加の方は八時半まで
に来山のこと)
- 一、坐禅 止 静 鐘 三声 坐禅
経行 鐘 二声 経行
放 禅 鐘 一声 放 禅
- 一、講義 木版三通 開経偈を唱えて「正法眼蔵」の提唱を
聞く
講師 龍泉院住職 椎名宏雄老師
平成六年度七月より「古鏡」の巻を提唱
- 一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談
正午解散
- 一、参加資格 年齢、性別を問わずどなたでも参加できます。
- 一、会費 無料
- 一、成道会坐禅
月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二
日曜。(本年は一二月四日)
釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴
聞、点心(昼食)を共にする。

青木画伯と記念作品(当山奉納)



沼南雑記

- 「参禅会記録」() 中は座談の
司会者。
- 四月一九〜二三日
長全寺授戒会
龍泉院より檀信徒・参禅会員の
一七名が参加。
戒師 余語翠敬大老師
詳細は教区護持会会報「さんが
第六号」参照(椎名老師編集)。
- 四月二四日 二六名
(中島南洲男氏)
龍泉院裏山にて感謝の筈掘り。
- 五月二二日 二三名
(佐々木秀子氏)
- 六月一日〜二日
一泊参禅会 二二名
於天徳山龍泉院
幹事 寺田哲朗氏
安本小太郎氏
- 六月二五日 二〇名
(政安裕良氏)
- 七月二四日 三〇名
(小沼亮氏)
- 八月一六日
龍泉院大施餓鬼会法要に、参禅
会を代表して、小畑幹事以下九
名が作務奉仕をさせていたたく。
法話 中野東禪老師
- 八月二八日 二二名
(木村勇氏)
- 九月二五日 一八名
(杉浦上太郎)
- ▼本年の一泊参禅会は、昨年に続
いて当龍泉院にて実施。
七炷の坐禅、椎名老師の講義は
「典座教訓」(四回目)。
ものを作るとは、生きていると
いうことは…人間の生きざまに
ついての教えも普遍化されてい
る。当教訓は今でも鶴見学園の
如く「給食倫理」の教科書とし
て活用との旨。
- ▼一泊参禅会にて、高間代表より
永六輔著の「大往生」を全員が
頂戴いたしました。深謝です。
- ▼老師の御奥様は病氣静養中とし
たが、七月参禅会にて久方振り
の笑顔ご披露。会員全員大安堵。
「明珠」が誕生して早や一〇年。
光陰は矢よりも迅かなり…。
- ▼椎名老師の玉稿の他、高間代表、
小畑幹事以下多数の会員各位よ
り原稿、写仏画、表紙絵をお寄
せいただき、かくも充実した特
別記念号作製が円成しました。
- ▼浅学非才の編集子、まさに難行
苦行の一カ月間でありました。
今、会員諸氏に只管感謝しつづ
く。謂ゆるの道理は日々の生命を
等閑にせず、私に費さざらんと
行持するなり。 初心に還る。

●発行/天徳山龍泉院 千葉県沼南町泉81
●印刷/岡田印刷株式会社 柏市高田1116-45
0471(91)1609
0471(43)3131
(杉風記)